「非宗教社会」の宗教性

――〈生きられた宗教〉をめぐる視座の系譜――

平良直

はじめに

近年、SNS上で日本を訪れた外国人観光客が、街の清潔さや人々の礼儀正しさに驚く様子を撮影した動画を多く見かける。電車内での静けさ、街路にほとんどゴミが落ちていないこと、整然とした行動など、日常の一場面に彼らは独特の精神性を感じ取るという。日本人にとってはごく当たり前の光景であるが、外部の眼差しを通して見たとき、それが一種の文化的特徴として際立つのは興味深い。もちろん、こうした動画が描く日本像には、観光者の視線による単純化や理想化も含まれている。しかし、それでもなお、外部の眼差しによって、当事者には自明化している日常的秩序や行動様式が可視化されることがある。

こうした外部の視線によって、われわれ自身が意識していない日本社会の基層文化が照らし出される。秩序や規律、他者への配慮といった行動様式の背後には、合理的説明を超えた精神的基盤が存在しているのではないか。日本文化論の多くがこの問題を扱ってきたが、そこで問われてきたのは、宗教と呼ばれる明確な制度や教義では

なく、むしろ生活習慣や価値意識の奥に潜む「宗教性」（あるいは霊性）の働きであった。

ところが、統計上のデータをみれば、日本人の多くは「自分は無宗教である」と回答している。制度宗教への帰属意識は薄れ、信仰実践も形式化しているように見える。それでも、年中行事や祭礼、日常の作法の中には、宗教的な象徴や倫理的秩序が今なお息づいている。つまり、日本社会は「非宗教的」に見えても、その深層には宗教的伝統に由来する精神構造が残存しているといえる。

本稿では、この一見「世俗」的な日常のなかに潜む宗教的次元を、「生きられた宗教（lived religion）」という視点から検討していきたい。まず文明論的観点から現代世界の世俗化を描いたエマニュエル・トッドの議論を手がかりに、世界的に進行する脱宗教化の構造を整理する。次に、ロナルド・イングルハートによる価値観調査を通じて、宗教的社会と非宗教的社会の差異を国際比較の枠で捉え、日本社会の位置づけを考察する。ただし、本稿ではこうした分析を通じて、日本社会の具体的事例を網羅的に分析するものではなく、主に米国の宗教研究におけるいくつかの視座を整理することで、「非宗教社会」の宗教性を捉えるための足場を確認したい。

トッドの世俗化論と「宗教ゼロ」状態

エマニュエル・トッドは、『西洋の敗北』において、混迷を深める世界情勢がなぜもたらされたのかについて、次のように指摘している。

近代以降、世界に大きな影響力を持ち続けてきた欧米社会では、文化を下支えしていた宗教的な精神性が形骸化し、それが現在の世界の混迷の要因となっている。たとえば、「自由・平等・博愛」といった価値観や、人道